防衛大学校本科第２９期学生及び理工学研究科第２０期学生入校式における学校長式辞（昭和５６年４月４日）

第4代学校長　土田　國保

本日、防衛大学校本科第２９期学生４７６名及び理工学研究科第２０期学生６０名の入校式を挙行いたしますに当たり、山崎防衛政務次官[注(1)]、佐々防衛庁人事教育局長[注(2)]、石崎教育担当参事官[注(3)]、村松陸上幕僚副長[注(4)]、穂積海上幕僚副長[注(5)]、松井航空幕僚副長[注(5)]をはじめとする各位、更に地元横須賀市からは横山市長[注(7)]、小佐野商工会議所会頭[注(8)]等多数の来賓の御臨席をいただき、防衛大学校として真に光栄に存じ、ここに職員並びに学生一同に代わり厚くお礼を申し上げます。

また、全国各地からはるばる御臨席をいただきました御父兄の皆様方に対しましても、心からお礼を申し上げますとともに、御子弟の栄えある入校を衷心よりお祝い申し上げる次第であります。

本科入学の新入生諸君、諸君は多くの受験者の中から、めでたく難関を突破されました。ここに入校を心からお祝いいたしますとともに、在校の全職員、全学生とともに、諸手を挙げて歓迎するものであります。

さて我が防衛大学校の教育目的は、防衛庁設置法第３３条に明示されてありますとおり、「幹部自衛官となるべきものを教育訓練する」こと

注(1)　山崎　拓
注(2)　佐々淳行
注(3)　石崎　昭
注(4)　村松榮一
注(5)　穂積鈔彦（としひこ）
注(5)　松井泰夫
注(7)　横山和夫
注(8)　小佐野皆吉

にあります。言葉をかえて申すならば、現代における士官候補生教育を行う大学でありまして、このため一般大学と趣を異にする多くの特色を有するものなのであります。ここに諸君の入校に当たり、学校長として次の三点を特に要望いたします。

まず第一に、諸君は、将来幹部自衛官たるべき学生として、「真(まこと)の紳士」にして「真(まこと)の武人」たるべく自らの修養、錬成に心がけられたいということであります。本校は、他の一般大学と全く趣を異にし、全学生の規律ある団体生活、団体行動、団体訓練を基幹となし、特に第１学年にあっては、形から入って魂を入れる、いわゆる躾教育から始めるのであります。これは、将来多数の部下を指揮統率するための幹部としての資質を養成する上で極めて大切なことなのであります。率直に申しまして、最初の間は環境の変化もあって、精神的、肉体的にも慣れず、困難を感じ戸惑うことも決して少なくないと思います。

しかし、１万１千余名にのぼる卒業生や、在校中の上級生諸君が、これを乗り越えて来ているように、不可能などということはありません。もとより当初から完璧を望んでいるわけではなく、時間をかけて徐々に筋金が入ってゆくことを目指すものであります。どうか諸君は、素直な気持でこの団体生活に積極果敢に飛び込み、その雰囲気になじみ、指導教官や上級学生の指導の下、実践を通じてまず幹部候補生たるにふさわしい容儀、態度の持主となってもらいたいのであります。とはいえ、４年間の学生生活が他律的強制の下にあって、各学生、個人の自主性、そして個性を失うようなものであっては絶対になりません。最初こそ他律的に感ぜられる環境、雰囲気も、時の経過とともに自律的、自主的な日常生活となり、一人歩きのできる立場におかれるのであります。将来自衛隊幹部たるに最も必要なのは、自制の心と自主積極の精神であります。歳月の経過とともに、諸君は指導される側から指導する側に、更に率先垂範を要求される側に立つのであります。どうか諸君一人一人が、この４年間の小原台生活を通じてたくましき成長を遂げられ、個性豊かにして随所にリーダーシップを発揮できる若人として、成長を遂げてゆかれることを切に期待するものであります。

第二に、諸君は学問の研鑽に十二分の努力を払われたいのであります。現在、世界先進各国の士官候補生教育は、一般の大学レベルと同等乃至それ以上の知的水準と学力を要求いたしております。我が防衛大学校におきましても、文部省の大学設置基準に準拠した理工学系、人文社会学系教育、更には防大独特の各種防衛学の履修を学業の内容としているの

であります。現代及び将来の幹部自衛官は、戦術、戦技のエキスパートであるべきことは当然のことながら、広い視野と豊かな教養に裏付けられた高度の学識、学力の保持者でなければならない時代が来たことを銘記すべきであります。率直に申して、日常生活に緊張がつづく当初の間は、学業においても精神的にやや受身の姿勢になりかねません。しかしそれがひいては堕性となって、その日暮らしに陥いってしまうのでは、４年間のこの歳月はあまりにも貴重すぎるのであります。スタートが大切であります。どうか諸君は、今後各教官方の御指導に従って誠実に勉学に努められ、学窓を巣立つ時には確固たる実力を蓄積されるよう期待するものであります。

第三に、諸君は課業として所定の基礎的訓練、体育に励まれるとともに、必ず何等かの校友会活動に参加して心身を鍛え、また多方面にわたる豊かな文化的情操を養っていただきたいのであります。幹部たるには、いかなる極限状況の下にあっても、最後まで己れが使命を達成し抜く気力・体力の持主でなければならないことは申すまでもありません。この小原台でのクラブ活動で流した汗が、省みて一生忘れえぬ尊き思い出になることは、先輩の卒業生達がひとしく口にするところであります。時あたかも２０歳前後、心身の鍛練には絶好の機会であります。また各般の文化活動についても、吸収消化力旺盛なこの青春時代の蓄積こそは終生の尊き資産となり、将来の更なる成長の基礎となるものであります。どうかこれらの活動を通じて、生涯を通じての良き師、良き先輩後輩、そして同期生とのきずなを結ぶ機会が得られますよう心から祈るものであります。

次に、理工学研究科に入学された諸君に申し上げます。諸君の多くは、今日まで第一線に立たれて日常の業務に忙殺されておられたことと思います。勉学の時間も決して多くはなかったことでありましょう。本研究科は、諸君がかつて防大或いは他大学において履修された基礎的な内容を思い出しながら、２年間という時間的余裕をもって、高度の専門分野の研鑽を遂げられる絶好の機会なのであります。

現在、世界各国は防衛力強化のため、科学技術部門の開発強化に全力をつくしております。当面並びに今後２１世紀を迎えての我が国防衛の最大課題の一つは、正に技術開発力の強化にほかなりません。諸君の精進努力を大いに期待するものであります。

桜花爛漫の春４月、若さと希望に溢れたこの小原台上にあって、祖国防衛のための尊き研鑽の第一歩を踏み出さんとする諸君に対し、御来賓

御父兄の各位とともに、心からその健闘を祈り、大いなる成長を期待しつつ、式辞を終るものであります。